

**KANEKA**

平成22年3月期  
第3四半期  
決算概要

株式会社 カネカ

## 1. 業績概要 (平成22年3月期 第3四半期決算短信 P. 1参照)

(単位：億円)

	前期 (4-12月)	当期 (4-12月)	前年同期比		今回修正 通期予想
			増減額	増減率	
売上高	3,600	3,068	△533	△14.8%	4,100
営業利益	115	134	+19	+16.3%	170
経常利益	101	125	+24	+23.3%	150
純利益	36	71	+36	+100.4%	75

- ◎ 売上高は前年同期に対して533億円・14.8%の減収となりました。
- ◎ 利益は前年同期に対して営業利益で19億円・16.3%、経常利益で24億円・23.3%、純利益で36億円・100.4%の、それぞれ増益となりました。

## 2. 事業セグメント別売上高・営業利益の状況

(平成22年3月期 第3四半期決算短信 P. 12参照)

(単位：億円)

	売上高			営業利益		
	前期 (4-12月)	当期 (4-12月)	増減額	前期 (4-12月)	当期 (4-12月)	増減額
化成品	734	580	△155	8	9	+1
機能性樹脂	556	455	△101	38	69	+32
発泡樹脂製品	561	412	△149	8	41	+33
食品	950	905	△45	22	68	+46
ライフサイエンス	315	273	△41	53	28	△25
エレクトロニクス	299	268	△31	13	△49	△63
合成繊維、その他	185	174	△11	20	13	△7
消去・全社費用	—	—	—	△47	△46	+1
計	3,600	3,068	△533	115	134	+19

- ◎ 売上高は全事業が減収となりました。営業利益では化成品、機能性樹脂、発泡樹脂製品、食品の4事業が増益となりましたが、それ以外の3事業は減益となりました。
- ◎ 為替は対ドル、ユーロとも円高となり、前年同期に対して売上高で△118億円、営業利益で△42億円の影響がありました。
- ◎ 当期の事業セグメント別の状況は以下の通りです。

- ・ 化成品事業  
塩化ビニール樹脂は、国内需要の低迷が続きましたが、輸出価格の改善に加え原燃料価格上昇に対応した販売価格の修正を行い、減収ながら増益となりました。塩ビ系特殊樹脂は、国内需要が低調に推移しました。か性ソーダは、海外市況が大幅に悪化するとともに国内需要が低迷しました。セグメント全体では減収増益となりました。
- ・ 機能性樹脂事業  
モディファイヤーは、アジア及び欧米市場の需要回復が本格化せず、日本市場も低迷し減収となりましたが、原燃料価格の上昇に対応した販売価格の修正やコストダウン等により増益となりました。変成シリコーンポリマーは、日本・欧州の建築関連需要の不振から減収となりましたが、販売価格の修正や原価低減策が実り、前年同期並みの収益を確保しました。セグメント全体では減収増益となりました。
- ・ 発泡樹脂製品事業  
発泡スチレン樹脂・成型品、押出發泡ポリスチレンボードは、国内市場の低迷により販売数量が減少し、ポリスチレンペーパー等の事業撤退の影響も重なって減収となりましたが、徹底した製造コストダウンと経費削減に取り組み、収益性の確保に努め、増益となりました。
- ・ 食品事業  
食品は、消費者の節約・低価格志向の影響を受けて需要が伸び悩み、販売数量・価格ともに下落しましたが、コストダウンと新製品拡販による収益の回復に注力いたしました結果、当セグメントは減収増益となりました。
- ・ ライフサイエンス事業  
医療機器は、インターベンション事業の販売が順調に拡大し、増収増益となりました。医薬バルク・中間体は、販売数量が伸び悩み減収減益となりました。機能性食品素材は、高機能品の販売数量が増加したものの、既存製品の競争激化に伴う販売数量の減少と価格下落が響き減収減益となりました。セグメント全体では減収減益となりました。
- ・ エレクトロニクス事業  
液晶関連製品は、エレクトロニクス製品の市場回復に伴う販売数量増加のため増収増益となりましたが、超耐熱性ポリイミドフィルムは前年同期の水準には至らず、減収減益となりました。太陽電池は、国内の販売数量が増加したものの欧州の需要低迷と競争の激化に伴う価格下落が響き、減収減益となりました。セグメント全体では減収減益となりました。
- ・ 合成繊維、その他事業  
合成繊維は、世界的な景気低迷の影響から海外市場の需要が低調に推移し、円高の影響も加わって減収減益となりました。また、その他事業は、前年同期並みの売上高となりましたが、エンジニアリング子会社の解散等により減益となりました。セグメント全体でも減収減益となりました。

## 3. 単独／連結子会社別売上高・営業利益の状況

(単位：億円)

	売上高			営業利益		
	前期 (4-12月)	当期 (4-12月)	増減額	前期 (4-12月)	当期 (4-12月)	増減額
単独	2,211	1,788	△422	63	30	△33
国内子会社	1,972	1,809	△163	40	77	+36
海外子会社	713	526	△187	30	41	+11

- ◎ 国内子会社では、全般的にコストダウンの徹底により、減収ながら増益を実現しました。
- ◎ 海外子会社では、コストダウンの進展などからカネカテキサス、カネカマレーシアなどが増益。カネカベルギーは減収減益となりました。

## 4. 海外売上高の状況

(平成22年3月期 第3四半期決算短信 P. 13参照)

(単位：億円)

	前期 (4-12月)	当期 (4-12月)	増減額	増減率
アジア	432	436	+3	+0.8%
北米	259	169	△90	△34.9%
欧州	397	265	△133	△33.4%
その他	132	112	△20	△14.9%
海外売上高計 (海外売上高比率)	1,221 (33.9%)	982 (32.0%)	△239	△19.6%

- ◎ 世界同時不況の影響が広範に及び、輸出、海外子会社の売上高ともに減少し、地域別には、アジアを除いて減収となりました。この結果、前年同期と比較して、海外売上高は239億円減少し、海外売上高比率も33.9%から32.0%へと低下しました。

## 5. 業績予想 (平成22年3月期 第3四半期決算短信 P. 1・5参照)

- ◎ 国内市場の需要回復のペースは依然として鈍く、海外市場では中国をはじめアジアの需要が回復基調にはあるものの、欧米市場回復の足取りは鈍い状況にあります。また、原油・ナフサ価格が再び高騰してきており、原燃料コストの更なる上昇が懸念される情勢にあります。この様な状況におきまして、当社グループの各事業は、販売数量増大のための施策及び製造コストダウンや経費の削減等の収益力回復策に徹底して取り組んでおり、通期の連結業績予想は前回予想を上回る見込みとなりました。

(単位：億円)

	前期		当期		対前年(通期)		当初予想 通期(当期)
	(4-12月)	通期	(4-12月)	通期予想	増減額	増減率	
売上高	3,600	4,496	3,068	4,100	△396	△8.8%	4,100
営業利益	115	76	134	170	+94	+123.6%	130
経常利益	101	58	125	150	+92	+156.6%	110
純利益	36	△19	71	75	+94	—	60

【22年3月期 第4四半期連結会計期間 前提条件】

為替：90円/US\$、130円/EUR、国産ナフサ：48,000円/KL

以 上